びわこの考湖学

60

大津城移転後の再開発

地名に残る商業都市の面影

京都と大津を結ぶ京阪電鉄の浜大津駅から大津港地下駐車場へ通じる歩道橋を降りた所に、「大津城跡」と記された石碑が設けられています。

天下分け目の合戦、関ヶ原の戦いの勝敗を左右したともいえる大津籠城戦については、連載の26回目でご紹介しましたが、今回はその城下にあたる大津の町についてお話しましょう。

城の規模や構造については、縄張り図などが残っていないため実態はよくわかりませんが、戦前までに行われた大津城郭研究や「大津町」の絵図などの検討から城の規模をみますと、本丸は湖中（現在の浜大津港あたり）にあり、その周りに奥二の丸、二の丸、三の丸、伊予丸が三重の堀を巡らせて配置されていたと考えられています。

北は湖岸から南は古中町通と京町通の間（大津祭曳山展示館の南側に石垣が残されています）までの南北約600㍍、西は外堀があった現琵琶湖疏水の取水口あたりから、東は旧橋本町までの東西約700㍍の範囲に広がっていたと考えられています。なお、西の中堀は、現在の川口公園として残されています。

籠城戦の最中、城主であった京極高次は城下の見通しをよくして西軍の隠れる場所がなくなるように城下町の焼き払いを命じました。この焼き払いによって、城下町は廃虚化してしまい、残念なことに詳しいことはわかっていません。

城が膳所に移されると、大津の町は再開発され、城下町から、東海道最後の宿場町、港町、園城寺の門前町へと性格を変えました。当時の町並みや町名については、寛保2（1742）年に描かれた「大津町古絵図」（大津市指定文化財）から垣間見ることができます。その繁栄ぶりや、100にのぼる町（鍛冶屋町、菱屋町など）から成り立つことから「大津百町」と呼ばれ、ひとつの町を形成していました。

大津城があったことを知らせる石碑。江戸時代初期に膳所に移築され、城の面影はない　＝大津市浜大津

また、元禄8（1695）年に各町に提出が指示された絵図が残っており、これにより各家の規模や構造がわかり、その町名は現在の自治会名に残されています。元禄年間には人口1万8000人を数え、日本屈指の商業都市に成長しています。

東海道と北国街道の分岐点には、幕府の法令が掲げられた高札場が設けられ、現在も「札の辻」として名が残っています。札の辻から逢坂峠に向かう八町筋の両側には本陣や旅籠も置かれ、宿場町の中心として栄えました。

また、城を巡っていた堀は一部が埋め残され、船入りとして利用されました。その数は14カ所にのぼり、たとえば、西側の外堀の一部は今堀関、東側は大橋関（風呂屋関）などが荷揚げ場として機能しました。

つまり、幕府は、豊臣秀吉の時代から保護、管理していた大津百艘船を管理下に置き、大津の港を湖上水運の拠点に位置づけました。「石場」や「島の関」は対岸の矢橋への旅人の渡し船の発着場としても賑わいました。

さらに、本丸のあたりには江戸幕府の直轄支配地（天領）として代官所や幕府領から集められた年貢を保管する御蔵も置かれています。

大津城は、坂本城や膳所城のようにあまり知られていませんし、まだまだわからないことが多い城ですが、城が築かれた背景やその町並みに思いを巡らせながら大津を訪れてみてはいかがでしょうか。

（滋賀県文化財保護協会　吉田秀則）